
『/CRASH』

人エ工人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『CRASH』

【Nコード】

N6957M

【作者名】

人工 工人

【あらすじ】

注意……本作は、同一作者による小説、『Not Nonfiction』の外伝です。

俺は、月崎学園高等部第二学年所属の《篠崎錐斗》だ。

突然だが、困った事になった。

性別不明気味な親友その一は急に失踪し、女にしか見えない親友その二は、突然アラスカに発った。

それはいい。そのうち帰って来るだろ。

困ったのは、空から降ってきた《蒼い結晶》がもたらした非日常の方で……？

たった一人のボーイミーツガール、開幕！！

『/CRASH』プロローグ(前書き)

『N・N』(以下、“本編”)に行き詰まったら書くつもりです。

主人公は、本編の主人公と一見仲よさげに見えていたアイツ。

王道かつ最強かつ熱血に書けたらいいなと思っています。

よろしく願います。

『CRASH』プロローグ

「はぁ？ エスパー少女？」

女友達の第一声は、そんなふざけた話題についてだった。

「本当なんだってば！！ その女の子が放課後に階段を降りててね、その時に偶然私が居合わせたんだけど……」。

その子、足を踏み外して転んだと思った瞬間、音も無く宙に浮いて着地して見せたんだから！！」

コイツの名前は《ひじさか比良境薫かおり》。俺のクラスメイトである。

馬鹿らしい事を叫んでいるみたいだが、時に薫、今は丁度最後の授業が終わったばかりの教室で、人が大勢残っているのは気づいてるんだろうな？

「へえ。“超能力者”ねえ……。随分と胡散臭い……。ゴホン。……もとい、随分と珍しいじゃねーの」「珍しいなんてどこの騒ぎじゃないわよ！！ 超能力者よ超能力者！！ 世紀の大発見じゃないの！！」

世紀の大発見、ね。正直言つて眉唾というか嘘臭過ぎるというか……、多分誰も相手にしないだろうな。

「それにしてもその娘、階段降りてただけで足踏み外すなんてすげードジっ娘なんだな」

「そういう問題じゃないでしょうが」

ああそうかい。残念だ。授業が終わるなり機関銃のように怒鳴り散らしたコイツは、顎に手を添えて少し考え込むと、

その眼に決意を携えてこう言った。

「……うん、私決めた。絶対にこの謎を解明して、世界的有名人になって魅せる！！」

絶対デスカ？

ゼツツタイよ！！

……うーむ、

「やめとけやめとけ。いくら俺にお前を止める事が出来なかった責任の一端があるって言っても、わざわざ精神科の病棟まで面会に行くのは面倒臭い」

さも面倒臭そうに言ってやった。

「……アンタ、いい根性してるわね……。」

なに俯いてプルプル震えてやがる。

普通に怖いんだが。

「ま、まあそれは置いて。取り敢えず、証拠になりそうな映像でもあれば別だけどな。最悪でもガセだと思われただけで済む。だけどそういうの、何も無いんだろ？ だったらやめといた方がいいぜ？」

もつとも、精神安定剤かなんかを注射されたいのなら別だけどな、最後に付け加えた。すると、「よ、よーしっ！！ 絶対に世紀の瞬間をカメラで収めてやるんだからっ！！ ま、待つてなさいよおおおおっー！！！」と、物凄い勢いで遠ざっていく声。

最後の方に至っては殆ど遠すぎて霞んでしまっていた。

……もうかれこれ三年の付き合いだから解る。多分、あいつが逃げてったのは自分が狂人扱いされてる様を想像したからじゃない。

この歳になってもまだ注射が嫌いなのだ。やれやれ、今更そんなんで大丈夫かね、あいつ。

……まあ、お陰で思い止まらせることが出来たから良かったんだけどな。

“超能力者”なんて非日常的な代物、信じたくはないが実在してもおかしくはない。

事実、その非日常的の片鱗を、既に俺は目の当たりにしてるんだしな。

だからと言って俺の日常が損なわれるのは御免被るが。

……ふう、さてと。そうならないために、先ずは件の“超能力

者”さんに釘でも刺しておくのでしょうか。

あいつは今日は見張ってないだろう。カメラ自体持ってないし、実は使うだけの“技能”《スキル》すら無い。あいつは機械音痴と
いうか、そもそもあらゆる事を初見では必ず失敗する。

そして一度でも成功してからは、絶対にミスを犯さなくなる。

良くも悪くも、行動の大部分が記憶力に依存している体質の為らしい。よく分からんけど。
さて

「行くか 《レヴィア》」

俺にとっての非日常、その象徴に声をかける。

ここは放課後の学園。その教室の一つに、恐ろしく不似合いに機械的な声とセリフが、微かに響いた。

『 イエス、マスター 』

『CRASH』プロローグ（後書き）

『CRASH』スラッシュ・クラッシュ！！

多分需要はないですね、ええ、はい。

さて、本作のプロローグでしたが、本編とは真逆に、伏線核心一切省き、ストーリーとはまるで関係ない駄文に仕上げられています。

つまらなくてすいません。

第一話 境界線ノ（前書き）

遅くなりましたが工人です。

本編と平行して考えるのは時間がかかりますね。やっぱり。

つまらないかも知れませんがどうぞ、ごゆるりと。

この作品はフィクションです。作中の全ては、実在の固有名詞と一切関係ありません。

第一話 境界線ノ

1. 『今はまだ、朝』

日常の中に、俺はいた。

ゴールデンウィークを目前にした四月最後の日。

そこには確かに俺がいた。

面倒な学校へと向かう足どりは軽い。

何を隠そう、二日後には長い連休が待ち構えているからである。

二千年代初期まで続いた“西暦”が“新歴”に替わると共に、暦の上には幾つかの差異が生じているらしい。

そのひとつが、毎年五月二日から九日まで決まった期日に七日続くゴールデンウィークなのだそうだ。

「最近は、妙に風が強いな」
嫌な風だ。

あの時を思い出す。

大切な人が、何処とも知れない遠くへ行ってしまいそうな風。

無遠慮に、そこに在ったモノを目茶苦茶に吹き飛ばした風。

「……やれやれだな。感傷的になるなんて、らしくもない」

コンクリートの地面にコツリ、と一人分の靴音が響く。

俺、篠崎錐斗しのざき たいとは、最近利用し初めた、路地裏通学の真っ最中だった。

路地裏通学とやら、親友が熱心に薦めるから試してみたのだが、人混みはなく、静かで、思っていたより薄汚れてはいないし、わりと広い。意外と快適じゃないか。

その友人いわく、この辺りは不良の溜まり場になっていたりはしないらしい。

なんでも、治安が良い訳ではなく、そもそも不良連中が居ないんだそうだ。

良い事なのか悪い事なのかよく分からないな、と口にしたら、友人その二が、『別に悪い訳ではないと思うが。道を踏み外した者は居ない。取り締まる必要すらない。相手が居なければ敵は居ない。皆が皆、平穩を存分に謳歌できるのだ。そら、これに勝る平和はないだろう?』とのこと。

まあ確かにその通りではあるので、せめてこれからも平和が続く事でも祈ろう。

「……あ」

と、路地裏の前方に見つけた小柄な後ろ姿は、「おーい、黒澄いー!」我が親友こと黒澄緒理緒であつた。

「あ 錐斗君、おはよう」

ちなみに、目の前で薄く微笑んでいる中性的かつ幼く見え過ぎるこの少年は、決して後輩でも女子でもない。

信じがたい話だが、同級生である。

あと、無邪気な容姿ではあるが、実は僅かに腹黒い気がする。主に批評関係の容赦の無さが。

分かりきっているが念の為だ。

「どんな念の為ですか、それは」

「自覚はあるだろ? ……あと、本編じゃないからって心の中に突っ込むな! どうやって読んでんだよ!?」

「それこそ分かりきってるよね。 “ギャグ回” って奴?」

「ねーよっ!! メタな発言はやめろ! ここは番外編だけど真面目な話なんだよ! いわば外伝なの!!」

「そうなの?」

「そうなの!! 今回は無かつたことにするけど以後禁止だからなっ!?!」

シリアスを壊すな! お前も向こうじゃあシリアスでやってただろ!

「自分で言っちゃったね……」
「お前のせいだよ!!」
「まあ、早く学校行こうよ」
「おい、待て流すな」

2・『未だ、朝』

閑話休題。

そついえばだが、横に居る友人は、この高校の正式名称が“月崎高校”ではなく、“月崎学園”だということを知らない。

月崎高校は通称なんだったのに。

中学から高校に進んだ時に生徒手帳が変わったのだが、初対面で俺はコイツの生徒手帳に“落書き”をしている。

落書きとは言っても、趣味で極めてしまった書類偽造技術の賜物なので、正しく完璧といえる仕上がりになっている筈だ。

だってコイツ気付いてないし。

良い子は決して真似すんな。書類改竄ダメ、ゼツタイ。

……とはいっても、校門やら何やらを見ればすぐ気付きそうな物なのだが。

そんな事を考えている内に校舎に着き、昇降口の下足箱へ近づくと、既に友人その二、琴塚蓮（ことづか れん）が靴を履き替えていた。

まあこの辺りの会話は省略する。

といっても、余り言葉を交わした訳でもなく、たいした面白みが無かったからなのだが。

「やれやれ、朝から顔を合わせるなり、面白みがないとはなんといふ暴言か」

琴塚。お前までギャグに流れたら、俺ごときでは收拾がつかん。いいか、心を読むな。

「そうか、すまない」

「あーもう、お前らってヤツは!!」

3・『日常の最終地点』

教室に向かう風景。

昇降口から廊下へ出て、教室がある四階建て中央棟の階段を登る。すれ違う教員達にそれなりの挨拶をしながら、三人で教室を目指していた時の事だった。

「なあ黒澄、琴塚」

なにかな、錐斗君。

どうした、篠崎。

と、二者二様の返事が返ってくる。

「今日さ、久し振りに遊びに行かないか？」

何となくの遊びの誘い。

とはいえ、別に遊びと言ってもカラオケやらボーリングやらゲーセンやらに行く訳じゃない。

こと俺達の関係において、そういった普通の友人関係は適用されないのである。

具体的な内容を言うなら、近くの公園や学校の一角を使った会話が主だ。

……まあ、ゲーセンにはごくたまになら行くのだが。

「ふむ、最近は割と暇だからな……私は構わないが」

「いいよー。あ、でもそういえば、友川さんとも約束があったんだっけ？」

ああ、そういえばコイツは、この間の一件からクラスの友川と仲良くなったんだっただか。

あの思い出したくもない大事件。

学校中を巻き込んだ惨劇を解決した所為で、黒澄は一躍有名人になった。

まあ、ある意味では元から有名ではあったのだが。

当時の光景について、『その時の黒澄は思わず見惚れるほど神々しかった』との噂も流れている。

……流石にそれは、地球の生命体とは比較にならんぐらいに尾鰭がついている話だろうけどな。

“カワイイ”から、“カッコイイ”へと人気が変わったのは確かだが、どちらにせよ本人は気付いてすらいないし。

前から思うんだが、コイツ色々鈍感すぎだろ。

いや、浮世離れというか、常識しらずというべきか。

人目を気にせず俺や琴塚に抱き着いてくるあたりが特に。

いや、そりゃあ「男が好き説」や「実は女の子疑惑」や「男の娘容疑」やらの変な噂だって立つだろうさ……全部似たようなもんだろとかいうツツコミはなしな。

そしてなにしろコイツ、『月校美少女ランキング』で二年間不動のトップランカーなのだ。

……ん？ 聞き間違いじゃないぞ。

真正正銘、『美少女ランキング』第一位、しかも史上初のV2を達成した“男子高校生”。

その名は『黒澄理緒』だ。

本人はエントリーすらしてないのにな。笑っちゃう話だ。

……なんて思って、参加者一覧の写真を確認したら惚れそうになった。だってカワイイんだもん。

黒髪黒目の健気な美少（幼？）女が、メイド服で上目使いしてるエントリー写真。

正体知ってるし、そういう趣味はないから興奮こそしないけどさ。

黒澄カワイイよ黒澄。

やっぱり、カワイイこそが正義だと思ったね、ホント。

でも、なんでそんな服着た写真が撮られてるんだらうか。お兄さんは心配です。

「……おい、錐斗くん？」

「篠崎。その、今にも天に召されそうな顔は控える事を薦めておう。はつきり言って、気持ち悪い」

はっ!?! つい熱く語ってしまった……反省。

「てか、人の顔面に対する評価として、気持ち悪いとかはやめる。傷つくだらうが」

そりゃ、お前らとは根本から出来が違うのは自覚しているが。

すると琴塚は、「……む」と言いながら手を口に当てて、

「すまない。……まあそれにした所で、そう悲観するほどではないと思うが？」

慰めなら不要ないぞ？

「うっん、琴塚君の言う通りだよ。錐斗君、僕なんかと違って格好良いし……」

「……ぐは」

そう言いながら男がもじもじするな顔を赤らめるな恥じらうな。不覚にも、コイツはマスクト的な何かだと思えなくなってきた。

「一つ良いか？ “マスクット”じゃなくて“マスコット”の間違いじゃないか？」

知ってるっつーの。

てか、洒落に対して真面目に返さないでくれ。傷つくだろ。

「すまない。寒すぎだ」

「うるさいな、ほっとけよ!-!」

「……ねえ錐斗君」

ん、なんだよ？

「……マスクットって、何？」

気づくの遅っ!? しかもツツコミ所そこかよ!

その上、偉大なるフルーツ様の名を知らないだっ!??

「確かにその名を知らない事には驚愕を禁じ得ないが……偉大、なのか?」

知らん。俺に聞くな。

「……………」

「ていうか、俺はせいぜい普通ぐらいの顔ですー。ふつめんだよふつめん。フルーツメンズ略してフツメン」

「……自覚が無いのは、本当に性質の悪い……………」

? …… まあ、そのセリフ、お前に言われるとは思わなかったよ、琴塚。

「…… 錐斗君も琴塚君も、どっちもどっちだと思っよ?」

お前もだよ!!! …… と、なぜかツツコミなければいけない気がした。

さて、元の話に戻ろうか。

「んー。誘っておいてなんだけど、三人揃わないなら別にいいか。悪い琴塚、今回は止めとこうぜ」

「なに、気にするな。私から言い出そうと思っていた所だ」

まあ、そうなるよな。それが俺達の関係でもある訳だし。

ああ、そろそろ俺達二年四組の教室だ。

二年六組の黒澄だけは、このまま真っ直ぐ突き当たりまで行くことになる。

「じゃあまた後でな、黒澄」

「縁があれば、また」

俺と琴塚が別れを告げて、ドアの前で立ち止まる。

ところで琴塚、その時代錯誤な別れ方はなんとかならないのか?

「なんともならん」

さいですか。

「じゃあまたね、二人とも」

とてとて、と歩いて行く黒澄を見送って、琴塚と教室に入る。

おーっす、とクラスメイト達から声を掛けられたので同じように返しておく。

俺の席は、窓側から二列目の前とも後ろとも言えない中程だ。琴塚は窓際が一番後ろの席で、俺からみて左斜め後ろの方向になる。

もはや作業となった一日の準備をこなし、思う。

いつも通りの、代わり映えのしない日常風景が、俺はこの上なく好きだった。

やがてホームルームから授業やらが始まり、いつも通りの日常が始まった。

この時だ。

この時まで放課後の用事を取り付けておくことが出来たのならば、俺はあんな選択を迫られる事も、あんな運命に巻き込まれる事も、あんな悲しみを思い出す事だっけなかった筈だ。

だから。

俺はこの時の俺に、一生感謝し続けることだろう。

なぜなら、この日。俺は、運命か、未知か、“彼女”に出会ったのだから。

《to be continued》

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6957m/>

『/CRASH』

2010年10月8日11時53分発行